

経済・金融 フラッシュ

鉱工業生産 13年10月

～生産計画の下方修正が続き、増産ペースは加速せず

経済研究部 経済調査室長 斎藤 太郎

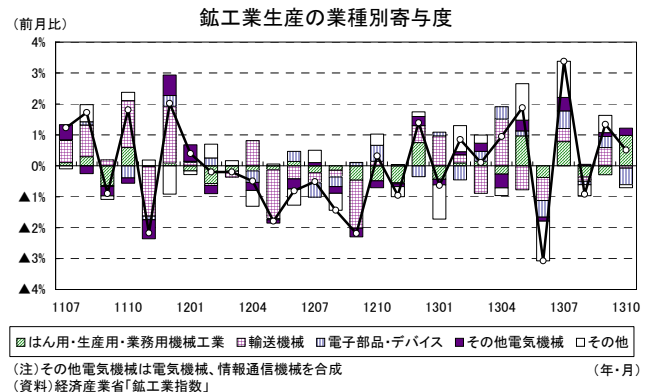
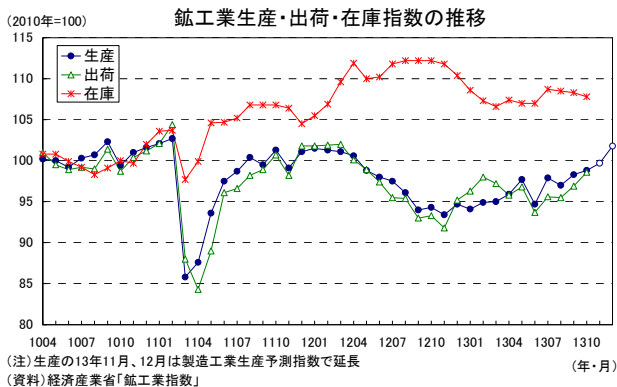
TEL:03-3512-1836 E-mail: tsaito@nli-research.co.jp

1. 生産の回復ペースは依然緩やか

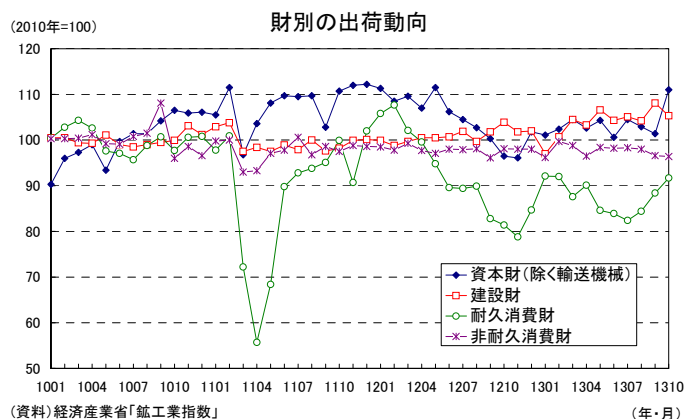
経済産業省が11月29日に公表した鉱工業指数によると、13年10月の鉱工業生産指数は前月比0.5%と2ヵ月連続の上昇となったが、先月時点の予測指数の伸び（前月比4.7%）、事前の市場予想（QUICK集計：前月比2.0%、当社予想は同3.2%）をともに大きく下回った。出荷指数は前月比1.8%と2ヵ月連続の上昇、在庫指数は前月比▲0.5%と3ヵ月連続の低下となった。

10月の生産を業種別に見ると、設備投資の持ち直しを反映し、はん用・生産用・業務用機械が前月比7.4%の高い伸びとなったが、スマートフォンやタブレット端末向けの需要拡大を受けて堅調に推移してきた電子部品・デバイス（前月比▲6.8%）、情報通信機械（同▲0.7%）が低下した。

速報段階で公表される15業種中、9業種が前月比で上昇、6業種が低下した。



財別の出荷動向を見ると、設備投資のうち機械投資の一致指標である資本財出荷（除く輸送機械）は13年7-9月期の前期比0.4%の後、10月は前月比9.5%となった。また、建設投資の一致指標である建設財出荷は13年7-9月期の前期比1.1%の後、10月は同▲2.6%となった。7-9月期のGDP統計の設備投資は前期比0.2%と低い伸びにとどまったが、機械投資の先行指標である機械受注が



このところ堅調に推移していることをあわせて考えれば、10-12月期の設備投資は前期から伸びを高める可能性が高いだろう。

消費財出荷指数は13年7-9月期の前期比▲0.1%の後、10月は前月比1.8%となった。非耐久財は前月比▲0.2%と3ヵ月連続で低下したが、耐久消費財が前月比1.8%となり3ヵ月連続で前月比1%を上回る高い伸びとなった。自動車を中心とした耐久消費財の出荷にはすでに消費税率引き上げ前の駆け込み需要の影響が表れている可能性がある。

13年前半の高成長の主演となっていた個人消費は、夏場以降は一進一退の動きとなっており、7-9月期のGDP統計の個人消費は前期比0.1%の低い伸びにとどまった。賃金を上回るペースで消費者物価が上昇し、家計の実質購買力が低下していることが個人消費の下押し要因となっている。ただし、13年度末にかけては耐久財を中心に消費税率引き上げ前の駆け込み需要が本格化することから、個人消費は今後伸びを高めていく可能性が高い。

2. 年度末にかけて生産の伸びは高まる公算

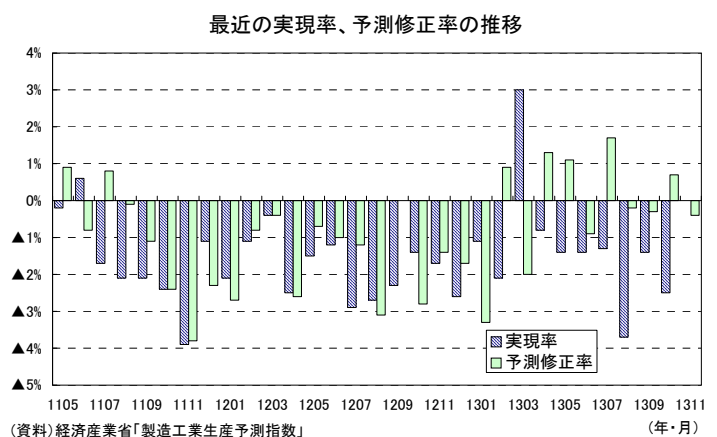
製造工業生産予測指数は、13年11月が前月比0.9%、12月が同2.1%となった。生産計画の修正状況を示す実現率（10月）、予測修正率（11月）はそれぞれ▲2.5%、▲0.4%といずれもマイナスとなった。鉱工業生産は持ち直しの動きを続けているが、生産計画が下方修正される傾向は変わっていない。

予測指数を業種別に見ると、設備投資の持ち直しを反映し、10月に高い伸びとなったはん用・生産用・業務用機械が先行きも高めの伸び（11月：前月比5.3%、12月：同2.9%）となっているほか、輸出の持ち直しなどを受けて鉄鋼（11月：前月比6.8%、12月：同1.5%）、化学（11月：前月比1.7%、12月：同0.4%）も増産計画となっている。

13年10月の生産指数を11月、12月の予測指数で先延ばしすると、13年10-12月期は前期比2.4%となる。4四半期連続の増産は確実だが、生産計画が下方修正される傾向が続いていることを考慮すると、7-9月期（前期比1.7%）と同程度の伸びにとどまることが見込まれる。

大幅な円安にもかかわらず輸出が伸び悩んでいることを反映し、鉱工業生産の回復ペースは依然として緩やかなものにとどまっている。ただし、生産計画が下振れしているなかでも在庫水準はむしろ低下傾向が続いており、在庫調整のリスクは低い。

先行きについては、消費税率引き上げ前の駆け込み需要に対応するため、自動車などの耐久財を中心に増産が見込まれることから、13年度末にかけて鉱工業生産の増産ペースは加速する可能性が高いだろう。



(お願い) 本誌記載のデータは各種の情報源から入手・加工したものであり、その正確性と安全性を保証するものではありません。また、本誌は情報提供が目的であり、記載の意見や予測は、いかなる契約の締結や解約を勧誘するものではありません。